



大昔の装身具

身

を飾る装身具（アクセサリ）の歴史は古く、国内では約2万3千年前の後期旧石器時代から確認されています。

素材には土（粘土）・石（玉や宝石類）・動物の骨角や牙・貝がら・ガラス・金属などその時代では希少で産地が限られるものを用いられ、頭飾り（冠・ティアラ）・指輪・ピアス・イヤリング・ネックレス・胸飾り・腰飾り・アンクレットなどの多彩な装身具は、加工や細工に高度な技術と手間が必要なものであります。

人々が身を飾る行為には、現代のようなファッションの意味も含まれると思いますが、持つ人の社会的な地位や身分を示し、身を護るためのおまじないや呪術などに関係する場合が想定できます。

北海道と沖縄諸島を除き、国内での装身具の発展は古墳時代をピークに一気に衰退します。その後1000年以上日本独自の装身具はほとんど発展せず文

明開化で西洋の文化が流入するまで、新たな装飾品の誕生を待つようです。

末吉町塚ヶ段遺跡からは縄文時代晩期（約2500年前）に該当する装身具が出土しました。それぞれ勾玉、管玉、小玉と呼ばれるもので、いずれも輝緑凝灰岩を用いており、極小の孔に紐を通してネックレスと考えられます。またこれらの装身具を形成したと考えられる、砂岩の有溝砥石も共存して出土しており、技術者の存在や技法の伝承といった背景も想定できます。塚ヶ段遺跡からは生活に必要な土器や石器が大量に出土しており、また住居跡や生活にかかる遺構も多数検出していることから、かなりの人員が長期間生活を続けていたようです。

装飾品の所有者はどのような人物だったのか？ 性別や年齢層は？ 常に身につけて生活していたのか？ 特別な日につけていたのか？ …… などなど、興味の尽きない遺物です。



【アクセス】
曾於市大隅町月野1946番地1



▲塚ヶ段遺跡出土の有溝砥石と装身具
実物は曾於市埋蔵文化財センターに展示